

人をさけ山里歩くこの頃の我はも淋し友あらなくて

琵琶歌

悲曲  
『涙の光』

帝都に近き片田舎

柱傾き壁落ちて

寢床に眺む月も亦

春は観花の樂みも

夏の緑りの滴たりも

秋風野邊に立ち初めて

冬の寒さも厭はれず

可細き腕の乙女子よ

花の盛りも早や過ぎん

見るもいぶせき賤が家に

鳴く虫の音は哀れなり

雨の漏るゝも何かせん

知らずに過す乙女子よ

流汗瀧の苦みも

月の眺めも涙そふ

雪に轉びつ日を送る

めぐりくゝて小車の

五ツ年せ前に父上は

吉田孝秀

遠き彼の世の旅の空

早くも越ゆる三途川

石をば積みて戯むるゝ

死出の旅路も何時しかに

過して今は兜卒なる

母は病の床に臥し

只感涙の外ぞなし

順な乙女の赤心は

靈驗如何で空しかる

都に學ぶ傍らに

朝な夕なの苦しみに

戀し懐かし慕ひつゝ

母の病氣や妹の

泣くに泣かれぬ血の涙

人に後るゝ例しなし

佛菩薩たち尋ねつゝ

賽の河原や地藏尊

嬰子の群を横に見て

鬼の攻苦や針の山

彌勒の許に法を聞く

愛し我子の給仕には

優しき看護に日も足らむ

天地の神に魂あらば

力と頼む兄上は

新聞賣りや牛乳の

思ひは遠く故郷を

自が苦學も忘れ顔

苦しき思ひ胸に込み

かゝる内にも歳月は

燕や雁の訪ひ去りて

三年が間夢幻

勇み勇みて郷關へ

其の喜びは如何ばかり

嬉し涙の溢れつゝ

此の喜びを分たんと

急げば早し我家なる

歸れば母や妹は

嬉し涙は咳込みて

やがて母上顔を上げ

如何に喜び給はんと

思ひは愚痴と化するなり

側の見る目も羨まし

貧乏しき中にも輝くは

清き親子の情愛ぞ。

今や目出度き卒業に

錦を飾り歸る身ぞ

隠せど色に現れて

寸時も母や妹に

汽車や電車はもどかしく

戀しき家を訪れぬ

袖と袂に取りすがり

暫し言葉もなればかり

無き父上のいましなば

嬉しきに付け悲しきに付け

優し母子の情愛は

朝日の露に潤ふごと

清き親子の情愛ぞ